
長門有希の記憶

涼説

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長門有希の記憶

[τι-ΠΖ]

N
1
0
1
8
E

【作者名】

涼說

【あらすじ】 長門の過去話

(前書き)

yahooブログで投稿した小説をそのまま投稿したのであしからず。

俺は今部屋に長門と2人でいる

その中沈黙する

「…………」

ふと俺は思った。

これはただ俺が沈黙に耐えられなかつたから、ただそれだけで言った一言

なあ長門、お前今まで何してたんだ？

「涼宮ハルヒの観察」

長門が本を読んだまま単調に答える

まあ予想どおりだつたが。

俺はそんなことが聞きたかったんじゃない

言い方を変えて聞いてみた

長門は変に解釈することがあるからな

「いやそうじゃなくてその、長門が生まれてから」

かなりマヌケな質問だったが長門は答えてくれる

そつ思つてた

「秘密」

わいつかと回りみひこ、 単調こ

「わいつか言つたくなになら言つな」

「・・・わいつ・・・」

長門は少し嬉しそうだった

彼が私のことを言い始めたとき少し動搖した

この感情が動搖かどうかは分らない

だけど私は動搖だと、そう感じた。

私には彼には知られたくない過去がある

それは変えられようの無い過去

情報の同期も時間逆行も不可能

私の記憶の中に存在する

記憶の中だけに存在する

そんな過去の話

名前の漢字指定を有希に変換した

ナガト・・・・・漢字指定もされてる長門ユキ・・・・・・

苗字は・・・・・そのとき情報統合思念体から情報の提供があつた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

情報統合思念体に情報の提供を申請する

それは・・・・・空から落下してきている

そのとき私はなにか冷たいものを感じた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

情報爆発を行つた涼宮ハルヒの観測し得た情報を情報統合思念体に報告する

私はこの惑星の存在理由を再確認する

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

長門有希……………パーソナルネームを決定した

しばらくたつた情報統合思念体からは何のアプローチも無い

・・・体温の低下を確認した情報統合思念体ばかりに気をとられ
ていた

生命活動の低下が分かる

・・・・・・・意識が薄れることが分かる

倒れていた私に誰かが近づく

少女だった

まだ意識はあるしかしそれも時間の問題

動くごとすら出来ない

私は彼女の記憶媒体を読む

彼女は私を見て声をあげる

彼女の正体が分かった

朝比奈みくる

異時間同位体

未来を安定させるためにその数値を入力させるために送られてきた

朝比奈みくるに敵性・・・は無い

私は、意識を失った

1時間33分45秒たつた

私の生命活動は再開していた

「あ、だだだ大丈夫ですか？」

隣に朝比奈みくる居た

「大丈夫」

私は最低限の「H/Hコニケーションシステムしか」えられていない

観測に「H/Hコニケーションは必要ないと判断されたからだ

しばらくあたりを見渡す

横におかゆが入ったお椀や水、薬などが置いてあった

さらに調べると現住所は朝比奈みくるが居ることになっていた

私は助けられたらしい

すぐに滞在場所を探すことにし、家から出ようとある

・・・・・

朝比奈みぐるに止められた

「まだ寝ないとダメですよ～」

後半はかなり聞き取りずらかつた

音として不愉快だった

朝比奈みぐるを無視して外に出た

「ついてこないで」

そう単調だけど強引言葉を言い残して

私は情報操作で体温の平常化をしたこれで体温は下がらない

そつそれを作らなかつたことに後悔した

1歩踏むたびに周りの景色が揺らいで変わつていく立ち止まつても回りの有機生命体が横をすきてこくそしてまた景色が変わる。

突然不良・・・と定義可能な者がぶつかってきた

私はかわそともせずそのままぶつかつた

「あ”？なんだテメーは！あ”？」

そつ言つて暗がりに連れ込まれた

その間にもなにか言っていた

抵抗はしない

「何とか言えよー。ねりー。」

腹部を蹴られた

抵抗はしない

観察してみると賭博で全財産を使い果たしたらしく

髪を掴んできた

私は防衛システムを起動させた

腕を掴む

そのまま腕から脳へ強い電気信号を送る

その有機生命体が倒れた

暗がりからでる

わざと回じようこ景色が変わる。

宇宙ではないんだ景色が変わらない。

また歩き続ける

しばらく歩いた。情報統合思念体から現在地、指定住所、指定住所の周囲人物のデータが送られてきた

最初から住所は決まっていたらしい

不可視フィールドを張つて指定された住所に長距離ワープした、また絡まれるかもしれないと思ったから、そうした

・・・

「朝倉涼子」

「あ、はじめまして。かな？」

「ワープして一番最初に田には入ったのは台所に立っている朝倉涼子だった

「情報統合思念体からなにか誰かが居ると言つ情報はなかつた。」

「ううとね、長門さんにお鍋作つてたんだけビ・・・苦手だった？」

「答えになつていな」

「別にいいじゃない、それに情報統合思念体には報告したわよ？」

「・・・やう

情報統合思念体がわざと情報を提供しなかつた。理由は・・・提供無し。

「はー。どーぞ」

やつぱりお鍋を置く。

中身は 毒性無し

箸を取つて一つ食す

「おこしー?」

「…………わいつ」

「そうよかつた」

そのあと朝倉涼子と鍋を食べた。

「長門さん弁当ばかり食べてそういうだから毎日」「はん作りに来るわ
ね」

そう微笑みながら帰つて行つた

私は北高に入学した

「なあ長門」

彼が声をかけなかつたらずつと記憶の鑑賞に漫つていた、そう思つ

「なに」

短い言葉で返す

「いやなんでもねえ」

「ハハ」

そう言いつと彼は涼宮ハルヒが来るまで口を開かなかつた

私は生まれた日の同期を一度もやつていない

これからもやらな

これは私が決めたこと

誰にも邪魔されない

なあ長門

「なに」

いやなんでもねえ

「アハ」

長門が珍しく考え込んでいたように思えた俺は声をかけた

がいつもひたり長門は答えてくれた

俺の勘違いだつたんだろ

とまあそんなくだらないことを考へていふうちに朝比奈さん古泉が部室に来て、そしてハルヒが勢い良くドアに体当たりして田を輝かせて「キヨン朗報よ!」と叫んでる

また野球でも始めるのか、と思いつつ

ハルヒに声をかける俺がそこに居た

(後書き)

改善できれいだけどあえてそのまま投稿w

http://blogs.yahoo.co.jp/cyphsf
18611/folder/1720195.htm1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018e/>

長門有希の記憶

2010年10月10日00時11分発行